

---

# ~ 消えた秘密基地 ~

愁真あさぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「消えた秘密基地」

### 【Zコード】

Z5863A

### 【作者名】

愁真あわぎ

### 【あらすじ】

皆さんは、小さな頃不思議な体験をしたことないですか?これは作者が体験した幼少期のお話です。

(前書き)

少し、読みにくい箇所があるかもしれません。御了承下さい。

皆さんは子供の頃『秘密基地』なるものを作った事はありますか？  
はたまた、こんな体験はした事はないでしょうか？

『一度行ったあの場所が、何度も行つても見つからない——』

私が、その体験をしていた事に気付かされたのは、小学校五、六年の時だつたと思います。

当時、大人気だつたあるアニメでその主人公の幼い頃のエピソードをやつっていたのです。内容はこうでした。

母親にピクニックをするのだと言い、お弁当を作つてもらつた主人公はウキウキしながら一人、出掛けました。

ピクニックだという名目通り、主人公はいつもより遠出をするのです。遠出をした先で、素敵な場所を見つけた主人公はそこで母親に作つてもらつたお弁当を広げようとした時、そこ地域の子供に声を掛けられたのです。

確か、私の記憶があやふやなのですが……そこでその子供と仲良くなつた主人公が見つけたその素敵な場所で夕暮れまで遊び、また遊ぼうねと約束をして帰り、次の日かにその場所へ行こうとするのですが、何度も挑戦してもその場所に辿り着けなかつた——

というお話でした。

そのアニメを見て、私は忘れていたあの記憶を思い出したのです。

そう、あれはあのアニメと同じ年頃で、幼稚園に上がる前だつたと思ひます。その当時、すぐ近所にいた幼なじみのMちゃんと良

く遊んでいました。

その当時は自分達がやっていることが大事だという事を知らずに過ごしていたのですが、私の母曰わく、二人揃うといつも何かしら悪さをして、まるでチビッコギャングの様だったといつしか話してくれました。

多分その時も、悪さの虫が疼いてした体験だったのかもしません。

私達は、いつものように家の側の坂の上にある公園を抜け、その先にある小さな雑木林で探検、ゴツコをして遊んでいました。

そこは公園から入って左手に小さな車道、右手に少し古いアパートが建つており、雑木林の突き当たりは線路で進入しないようにフェンスが張つてありました。

アパートの裏側は線路と隣接しており、少し窪地になつていて、そこアパートに住む学生さんが捨てているのか、沢山の雑誌が落ちているのです。私達はそれを『お宝』と言つて拾つては読んでいたのです。

中にはイケない雑誌もあり、一人してそれをゴツソリ見ては

「エッチやなあ」

と言い合つて笑つたり、その本を放り投げたりして遊んだり、とても女の子とは思えない遊びをしていたのです。

暫くして、その遊びに飽きてしまった私達は、たまには線路を超えて遊びにいつてみようか、と考えたのですが、さすがにそれは思い留まり別の遊びを考えたのです。

とりあえず、いつも遊ぶテリトリーを越えてはどうか?と思いつ立ち二人はそれに合意し、笑顔で意味あり気に顔を合わせると、ガツチリ手を繋いで目の前の車道を渡つたのです。

この車道は、良く駄菓子屋さんに行くのに使つので、ここから更に奥へと私達は進みました。

丁度、駄菓子屋さんとタバコ屋さんの間に下り坂が私達のテリトリー外なのです。

そこを躊躇いもせずキャツキャツと、はしゃぎながら一人はテリトリー外を超えたのです。

新しい場所、二人は嬉しくて飛び跳ねました。

「あさぎわちゃん、やつたな」

「うん、ほな探検しよか！」

そう言つて再び手を繋ぎ、その下り坂の道を歩きます。

少し違う道に入っただけなのに、こんなにも景色が変わって見える、それが何だか凄く嬉しくて二人の、周りを見渡す瞳は輝いていました。

下った先は、すこし高級な住宅が並ぶ道で、色々な門構えの家に「あんな家に住みたいなあ」

等と話しながら歩いていました。

そんな高級住宅街の中に、不似合いなアパートがひとつに入ったのです。

少し古くて一階建て、鉄製の階段がついていましたが、青い塗料が所々剥げていて、錆びた色が見えていました。

建っている場所も少し不自然で、住宅と住宅の間にあり、そのせいでアパートの奥まつた所は日当たりがなく、不気味さを醸し出していました。

「ここ、ちゃんと人、住んでんのかな？」

そう口に出したのは私でした。

「ちゃんは何を思ったのかその薄

暗いアパートへ一人、フラフラと入って行つたのです。私が止めようと手を伸ばしたら、すぐに暗い奥から私を呼ぶMちゃんの声がしました。

「おるみたいやで、だつてほら三輪車あるもん」

その声に私は慌てて彼女の傍まで行き、Mちゃんが指差す物を見ました。確かに差す場所には、まだ真新しい黄色の三輪車がありました。

するといきなりMちゃんが更に奥へキヤツキヤツと笑い声を上げて走つて行つたのです。

私はびっくりして茫然としていると、奥からMちゃんは私に

「あざわちやん、ここで鬼じつじよや！」

と言い出し奥へ奥へと走つて行きます。私は薄暗いそこに、少し後退りしましたがMちゃんの早く、早くと急かす声にえいつ！ と氣合いを入れて彼女を追つたのです。

初めは暗くて、何が何だかわからなかつた私でしたが、次第に暗闇に慣れ、必死に彼女を捕まえようと奮闘しました。

そんな時、一瞬だけですが彼女のお母さんの手作りだといつ派手なワンピースがチラリ、チラリと色を見せたのです。

何だか後ろから光を当てられた様で、彼女の顔は見えないのですが、体の線が逆光を浴びてくつきり見えました。

私は彼女を追うのをやめ、その光の元を探しました。良く見るとコンクリートの壁に小さな穴がぽつかり開いています。穴の大きさは、私達位の子供が一人、入れるか入れないか位の大きさで、中を覗くと明るい光が見えました。

私は迷わずその穴に顔を突っ込みました。

それを見ていたMちゃんは、後ろから不思議そうに

「あさぎりちゃん、その穴なんやろなあ？」

と聞いてきたので、一度穴から頭を出し、わからんと返し、先に穴の中へ進んでみたのです。

穴は意外に狭く、縦幅は拳ひとつ分余裕があつたのですが、横幅がギリギリで少し無理に入ると衣服が擦れ、ドロドロになつてしましました。

それにも構わず私は、ほふく前進で穴の中を進みました。

よつやく這い出たそこは、縁をそのままに、住宅の裏側で空き地になつていました。ぽかんと開いたその空間に私は驚き、首を巡らしているとMちゃんも穴から這い出てきて、同じよつじびつくりしていました。

「あさぎりちゃん……」「何？」

Mちゃんは果然と私に聞いてきました。聞かれた私も知る由もなく、ただわからん、と首を振るだけです。

足元にはクローバーが沢山茂つてあり、所々に蓮華草のような花が咲いていて、どこかの河原に迷い込んだかのようでした。

暫く一人して驚いた後は、しきりに四つ葉のクローバーはないかと探し始めていました。

そうじうじしている内に、四つ葉のクローバー探しに飽きた私達は、次に蓮華草で花輪を作ろうとこつ事になり、今度は花摘みに夢中になる。

そこでバッタに遭遇すれば、花摘みそつちのけでバッタ捕りに夢中になつたり……。

ひとしきり遊んで疲れた私達は、そのまま草の上に「ロソン」と寝転がり、一人して空を見上げました。

気が付けば、空はほんのり黄金色で、それとも帰らなければならぬ時間になっていました。

「Mちゃん……そろそろ夕方やなあ」

隣に寝転がるMちゃんに、空を見ながら言つと彼女はうん、と言つたつくり返事が返ってきました。

私もそれきり黙り、静かに黄金色に染まつていく空を見ていました。

「あせきちやん？」

そう、急にMちゃんに呼ばれた私は、ん？ と返事をし横を向くと、彼女は「口」した横顔でこう言ったのです。

「うー、うちらの秘密基地にじよや。あせきちやんとひが、一人の秘密の場所や！」

私はその言葉を聞いて、瞳を輝かせました。

「うん！ それいいな、そひじよつー。私とMちゃんの秘密の場所！ 秘密基地やー！」

興奮し、はしゃぎながら起きあがると、Mちゃんも起き上がり、私の方を向いて口元に人差し指をあてるど、真剣な顔をして、念を押すよつて、元

「絶つ対、他の人に言つたらアカンでー」

と言つので、私は強く頷きました。それを見たMちゃんはすぐに満面の笑顔になり、帰ろか、と立ち上がったので私もうん、とまた頷いてまたあの穴の所へ戻り、この場所を後にしたのです。

穴を再び抜け、あの薄暗いアパートに戻つてみると、夕方で人が帰つてきたのか、台所だらう明かりがひとつ点いていて、中から子供と母親の会話する声が聞こえていました。

「ちゃんと人、おつたみたい」

と小声で私が言つと、二人でクスクス笑いながら薄暗いそのアパートを出たのです。

道に出た私達は再び手を繋ぐと、昼間とは逆で家のある方へ歩き、坂を上りました。

「あさぎちゃん、また来よな

「うん、また来よな」

と言い合いながら、公園の前の坂を下り、一人一人自分の家へ帰りました。

しかし、それから二人は何度かあの場所へ行つてみたのですが、穴はどこにも無く、あの秘密基地へは辿り着けなかつたのです。

いつしか、二人は小学校に上がり、お互いその記憶は薄れ、そのうちMちゃんは一年生の中頃で、隣町に引っ越しして行きました。

あのアニメを見ていなければ、ずっと忘れていた記憶――――――

結婚した現在も、いつやつて覚えているのはあのアニメのおかげかもしません。

時々、春の爽やかや風に触れた時、不意に思い出すことがあります。もしかしたらあの場所は、私達一人がいざれ離ればなれになってしまふことを知っていた神様が、思い出作りにと授けてくれた場所なのかもしません。

その時のことと思い出すと、あの派手なワンピースがよく似合う彼女の事を思い出します。

幼い頃の私達の大切な思い出……。

}Fin{

(後書き)

この作品に手を留めていただき、誠に有難うござります。  
何分、文章力のない愁真ですので読みづらかったかと存じます。  
もし、宜しければ読者様の感想、ご意見などをメッセージにお寄せ  
下さい。

ついでに評価や、何故「良い」のか「悪い」のかを書いていただけ  
ると非常に嬉しいです。長くなりましたが、今後とも愁真あさぎを  
宜しくお願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5863a/>

---

～ 消えた秘密基地 ～

2011年1月19日02時24分発行